

さいたま「子育て & 子育て」地域支援プロジェクト

大学・県・民間の協働による調査研究

Support project of 'child-development & child-care' in Saitama

代表者: 吉川 はる奈 (Haruna YOSHIKAWA)

(教育学部・助教授)

1、はじめに

「子育て支援」は、今や、国をあげての緊急検討課題になっている。さいたまの「子育て支援」の質を高める足がかりになることをめざしたプロジェクトは、地域に根ざした本大学にとって、必要不可欠なテーマである。

プロジェクトは、子育て支援を「子育て」という「子どもが発達する」という視点、「子育て」という「大人が子どもを育てる」という視点、双方から考察していくものである。

さいたまの子どもや家族が、すこやかに成長できるように、そのような支援を可能にする研究をめざす。同時に、次世代の親でもあり、また卒業後、教師として子どもや家族に関わる学生への教育的視点、双方をとりいれながら研究をすすめる。以上が本プロジェクト設定の趣旨である。

2、プロジェクトの構成

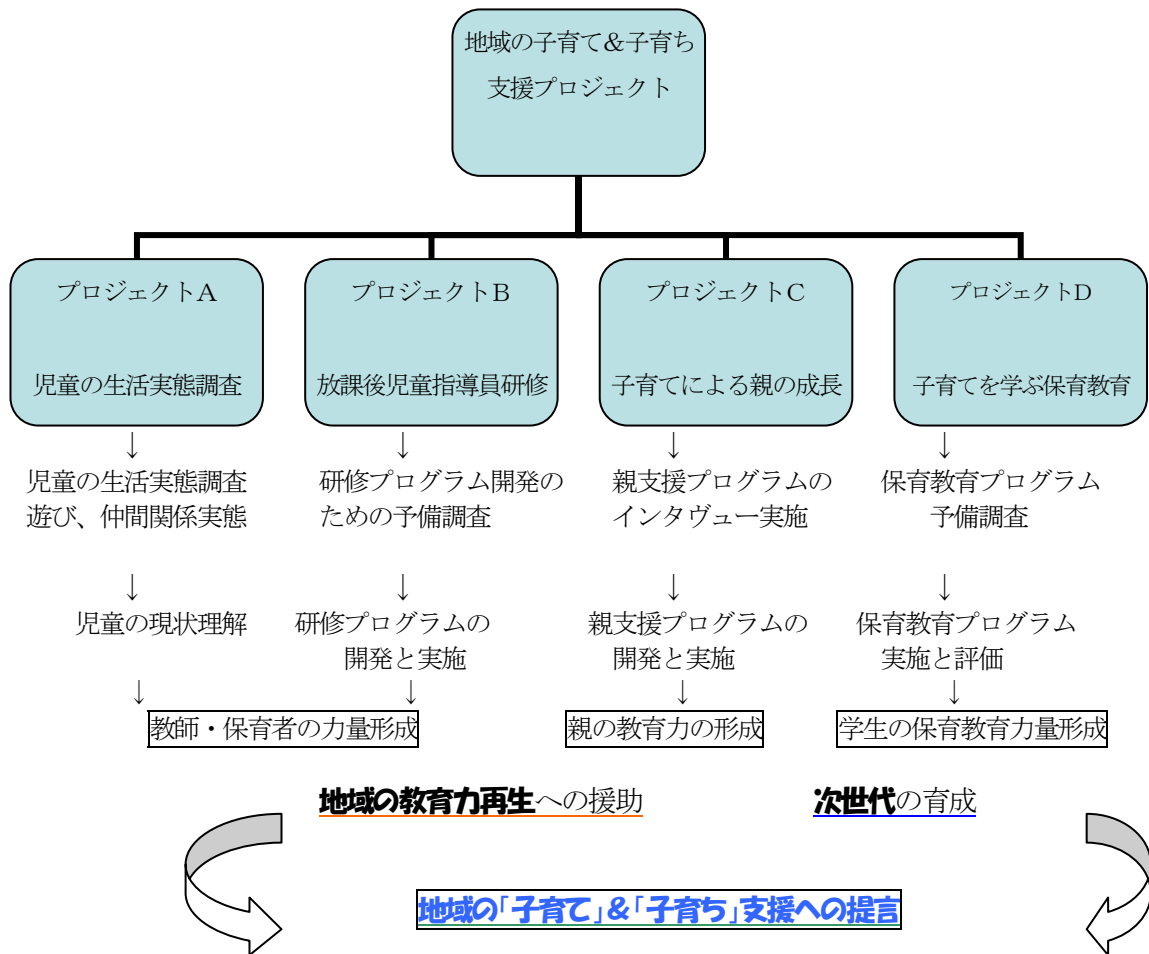


図1 プロジェクトの構成

3、 研究経過および考察

①小学生の生活実態調査(子ども支援プロジェクトA)

現代の小学生の生活実態調査を行なった。家庭生活や学校生活を含め、5・6年生の実態調査を行なった。その中で、遊びの内容と仲間関係については、10年前に比較するとゲーム遊びが著しく増えていること、さらに仲間関係が少人数化、固定化する傾向が明らかになった。

ゲームの増加は予測されたことだが、著しさは予想を上回るものだった。また仲間関係の固定化は10年前との比較で大きく異なる点だった。固定化することは、仲間関係が壊れたときの修復の際に大きなリスクとストレスを感じることとなる。また、少人数化しているため、関係修復を援助するものが存在せず、危機的である。

教師、大人が、仲間集団作りや子どもの遊びを具体的に援助し、発展させるように積極的に働きかけることが必要である。

②放課後児童指導員の研修の調査・開発(保育者支援プロジェクトB)

県内の放課後児童指導員(学童保育指導員、保育者)に対して、研修プログラム開発のための予備調査を実施、インタビュー結果と合わせて研修プログラムを作成した。現在もプログラムは実施中である。子どもの問題、家族の問題の増加、複雑化に伴い、研修を通して保育者、指導員としての力量を高めることの必要性、放課後の場の充実を求める声は強い。

③子育てによる親の成長(親支援プロジェクトC)

「社会で子どもを育てる」というキャッチフレーズを掲げ、子育てをする「親を支援する」取り組みが多くの自治体で盛んである。親を支援する取り組みは一方的な支援ではなく、「親の成長」を視野に入れることが大切になる。

学生に自らの子育てを伝えるという親支援プログラムを通して、親自身が自己の成長を実感していく過程が明らかになった。異世代との交流は親自身も貴重な機会となっていた。

また参加した学生の多くは、自分以外の親と話すことは初めての体験とのことで、異世代とのコミュニケーションがいかにか少ないかということ、また教育的な取り組みに取り入れることの必要性も示唆された。



④子育てを学ぶ保育教育(学生教育支援プロジェクトD)



子どもの姿を具体的に理解する、生活する子どもの姿を全体像で理解していくことが難しいといわれる。対人関係が維持できないという問題には、相手を理解する力の弱さが影響している。将来、教師となる学生の保育教育力の育成は具体的に行なうことが必要で、そのためには、保育現場の実習のみでは不十分である。つまり、家族と生活する子どもの姿に触れ、子どもの姿を全体像で理解することが大切である。親と子の姿に触れることで、人の発達「子育て」を自分の成長過程の中で捉えることがみられた。